

主 題：神の忍耐

聖書箇所：ルカの福音書 13章1－9節

私たちは日々の生活で忍耐が必要なとき、また、忍耐を強いられるときがあります。今日は私たちの忍耐ではなく、神の私たちにに対する忍耐について考えましょう。

★ 私たちに対する、神の忍耐とはどのようなものでしょう？

1. すぐに他人を裁いてしまう私たち 1－5節

・何が起こったのでしょうか？

ピラトが神殿でガリラヤ人たちを殺した！

ある人たちが、最近起こった悲惨な出来事をイエスに告げました。「ユダヤの総督ポンテオ・ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜた！」と言うのです。もっとも、これは文字通りに受け取るのではなく、要するに、ピラトの兵士たち（＝ローマ兵）が、神殿において犠牲をささげにきたガリラヤ人たちを殺害したということでしょう。『いけにえ』と言及されているところから、事件が起きたのは祭りの時であろうと思われまふ。この事件そのものは、聖書外の（歴史的）資料に記録がありませんので、詳しい事情は分かりません。

・当時のガリラヤ人にはどんな傾向があったのでしょうか？

いくらピラトであっても、全く無意味にユダヤ人（ガリラヤ人）を殺すことはないでしょうから、恐らくは何らかの（政治的な）理由があるものと思われまふ。それは、わざわざ彼らについて、何度も『ガリラヤ人』と記していることからある程度は、察することができます。と言うのは、ガリラヤとは、反ローマ的武装集団である熱心党の発祥の地であり、当時においてもその運動の中心地だったからです。当時のことをよく知るヨセフォスという歴史家は、ガリラヤ人たちのことをこう表現しています。「（彼らは）いつも革新好きで、変革の気があり、騒動を喜ぶ」（ヨセフォス自伝17より）。以上のことから、恐らくは、祭りの騒ぎに乗じて小規模の武力蜂起（ほうき）か騒動のようなものがあり、それをピラトが武力をもって鎮圧した、というような事件だったのかも知れまふ…。

・イエスが非難しておられるのは、「彼ら だけが悪い」という思いです。

いずれにせよ、犠牲を捧げにガリラヤから来た人たちがローマ兵に殺されたという事件は、ユダヤ人たちにとって、かなりショッキングな出来事であったに違ひありません。「なぜ神はこのような残忍な殺戮をお許しになったのか？ どうして聖なる場所において、異邦人がユダヤ人を殺すようなことが起こるのか？」そのような問いが当然起こります。

そして、その中に居た何人かはこう考えたのです！「このような災いに遭うとは、彼らはよほど罪深い人間であったに違ひない。人の目はごまかせても、神の目はごまかせないのだ。その神が彼らを裁かれたのだ…」と。このような因果応報的な思想は、人々の間で一般的（参ヨハネ9：1－2）でありました。イエスに事件を伝えた人々は、主に後者の考えを抱いていた人々であったようです…。それは、彼らの報告に対するイエスの答えからも分かります。『シロアムの塔』が倒れ落ちて亡くなった18人のことも、同じ。ある人たちはそういった人たちのことを「特別、罪深い人たち」と考えていたのです。

そのような彼らに、イエスは問い返されたのです。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、彼らが自分たちとは違って、特別に罪深い者だったからだと思うのか？」と…。あなたたちは、他人のことは簡単に裁くが、自分たちはどうなのか？ 全く、悔い改めるべき問題は無いのか？ 一体、あなたたちはさっきまで何を聞いていたのか？」と、そんな思いがイエスの内にはあったはずなのです。

・その直前には、どんなことが教えられていたのでしょうか？

どうしてそんなことが言えるのでしょうか？ 13：1に『ちょうどそのとき』と書かれています。『ちょうどそのとき』イエスは一体何を話しておられたのでしょうか？ 少し前の12章を見てみますと、イエスは『偽善者たち。あなたがたは地や空の現象を見分けることを知りながら、どうして今のこの時代を

見分けることができないのですか。』(12:56)と人々に話していたのです。では、『今のこの時代』とはどのような時でしょうか？それは、その後の話で示されています。『あなたを告訴する者といっしょに役人の前に行くときは、途中でも、熱心に彼と和解するよう努めなさい。…』(12:58)と主は言われます。つまり、『今のこの時代』とは「和解すべき時」なのです。人間との間の話ではなく、神との和解の話です。12:56に『偽善者』とあることから分かります。和解といっても、神と人との間では悪いのは一方的に人間の方だけから、これは神に立ち帰るべき時、悔い改めるべき時、という意味なのです。つまり、そこでは、聞いている1人1人が、自らの罪を問われているのです。それぞれが悔い改めを呼びかけられている時なのです。

『ちょうどそのとき』のことです。そこで幾人かが、自分のことではなくて、他の人々のことを話し始めたのです。イエスが丁度、そこにいた人々に向かって悔い改めを話されたのに、そこにいた人たちは、こう言うのです。「その悔い改めをしなかった愚かな人たちが、このように(つまり、ガリラヤ人たちを指す)裁かれたのです。」と。滑稽です。しかし、人はこのようなことをするものです。神のことばの前に自分が引き合いに出されるのを避けようとします。神の言葉の前に、自分自身の生き方が問われ、自分自身の決断を問われることを回避しようとします。そして、他の人々の罪について話し始めるのです。あるいは、罪と悔い改めについての一般論を始めるのです。そこではもはや、裁かれる者の位置に自分自身は存在しません。あくまでも自分自身は裁く者の位置にいるのです。

ですから、主イエスは、彼らをもう一度神の呼びかけのもとに引き戻そうとしてこう言われるのです。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。決してそうではない。言うておろくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」と。つまりここで、イエスが言うておられるのは、「あなたたちはすぐに自分ではなく、他人を責めたり、人を上から見下すような態度を取ったりするが、あなた方がまず初めに注意しなければいけないのは、他人ではなく自分自身(=あなた自身)だということです!1 コリント 11:28「自分を吟味して…」、マタイ 7:1-5「さばいてはいけません。さばかれたいからです。…偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。」

・私たちの弱さ…

私たちは、他人の問題点や弱さにはすぐ気付いても、自分の問題にはなかなか気付きにくい傾向があります。神様から、何度も何度も試練が与えられていても、なかなか自分の弱さ、問題点、罪には気付かないものです。メッセージを聞き、みことばを学んで、本当なら、まず、自分自身の問題が示されるべきなのに、すぐに、「あ!これはこの人のことだ!」とってしまうことがあります。

2・神に対して、かたくなな私たち 6-9 節

そこでイエスはさらにもう1つの例え話をされます(13:6-9)。

・ぶどう園のたとえで教えられていること

ぶどう園と書かれています。当時、そこにいちじくの木が植えられていたことは不自然なことではありませんでした。ここで、私たちが見なければならぬことは、要するに、「いちじくの木は、良いところに植えられて、必要な手入れをされていた」ということです。道端に生えている木ではありません。そして、当然のことながら、植えた人は、いちじくの実がなることを期待して待っていたのです。しかし、その期待が見事に裏切られたのでした。しかも1回ではありません。『3年もの間』と書かれています。確かに、いちじくは植えてから、実がなるまで数年の時間が必要ですが、『実を取りに来たが』とあるように、本当なら十分実がなっていて当然の状態だったのに、まだ実がなっていなかった、つまり、繰り返し裏切られてきたということです。

聖書に見られる神と人との関係は、ただ人が神を信じるという関係ではありません。神が人を信じるのです。人を信じて、神は最善を尽くされます。そして、その神の信頼に人が真実をもって応答することを期待されるのです。しかし、その期待が裏切られます。聖書の中には、繰り返し裏切られた神の嘆きの声が満ちています。預言者イザヤは、神の嘆きを次のように歌いました。『さあ、わが愛する者のためにわたしは歌おう。そのぶどう畑についてのわが愛の歌を。わが愛する者は、よく肥えた山腹に、ぶどう畑を持っていた。彼はそこを掘り起こし、石を取り除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、酒ぶねまでも掘って、甘いぶどうのなるのを待ち望んでいた。ところが、酸いぶどうができてしまった。そこで今、エルサレムの住民とユダの人よ、さあ、わたしとわがぶどう畑との間をさばけ。わがぶどう畑になすべきことで、なお、何かわたしがしなかったことがあるのか。なぜ、甘いぶど

うのなるのを待ち望んだのに、酸いぶどうができたのか。』(イザヤ5:1-4)

⇒これは期待を裏切られ続けてきた神の姿です。

私たちは、今日のたとえ話の中において、ただ短気で冷酷な審判者としての神を思い描いてはなりません。旧約聖書に見るように、この例えの背後には、期待を裏切られ続けてきた神の深い嘆きがあるのです。主人が切り倒さねばならない木は、他の誰かが植えた木ではありません。他ならぬ、自分自身が植え、実りを期待してきた木なのです。その木を切り倒すということは、主人にとっても実に悲しい事だったはずです！

さて実際には、この話は、いちじくの木が切り倒されたという筋書きにはなっていません。主人への説得へと展開します。「御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます」と番人が言うのです。さてここで私たちは、単純に、主人は父なる神を表し、番人はイエス・キリストを表すと考えてはなりません。父なる神は怒りと裁きの神であり、キリストは愛と赦しの神であるというのは、まったく非聖書的な思想です。何故なら、聖書は、キリストを世に送られたのは、他ならぬ父なる神であると教えているからです。他のキリストの例え話の場合と同じように、私たちは登場人物のそれぞれに意味を持たせて寓意的に読むのではなく、この物語全体の中に神の『慈愛と忍耐と寛容』(ローマ2:4)を見るべきでしょう。つまりこの話の要点は、本来ならば切り倒されて然るべき実を結ばぬ木が、なおも残されてそこに立っている、ということなのです。

●このたとえの結論はどうなるのでしょうか？

このように、主イエスのたとえ話は番人の言葉で終わります。この1年後にいちじくの木がどうなったのか、実を実らせたのか、それとも切り倒されたのか、語られておりません。それは何を意味するのでしょうか？その話の続きを語るのは、他ならぬこれを聞いた者本人であることを意味するのです。他の誰でもありません。これを切り倒された木の話にしてしまうか、それとも実を結んだ木の話にするかは、これを聞いた者(=あなた!)にかかっているのです。悔い改めは、私たち自身に呼びかけられているのであり、神の言葉の前には、私たち自身が引き出されているのです。他の人のことを語ってはいけません。

この福音書の最後において、復活されたキリストは弟子たちにこう語っておられます。『そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらのことの証人です。」

(ルカ24:45-48)。この主の約束の言葉の延長線上に、私たちの教会も存在します。罪の赦しを得させる悔い改めが、主の名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられてきました。今日、このところにおいても、罪の赦しを得させる悔い改めが、主イエスの名によって宣べ伝えられているのです。本来ならば、とうの昔に切り倒されていて然るべき私たちが、今なお残されているという事実を、そこに現されている神の忍耐と寛容を、神への恐れをもって受けとめるべきです。そして、私たちに今なお福音が託されているこの恵みの時を、私たちは決して無駄にしてはならないのです。

どうか、神の忍耐が続きますように。また、多くの人たちが、今この時に(救いのチャンスがある時に)、自分の罪を悔い改めることができるように。また、執り成しを祈る私たちも、他人事ではなく、同じ憐れみを頂き、同じ、かたくなさを持った者として執り成しの祈りを捧げることができるように、祈ってゆきましょう。

マタイ17:17『イエスは答えて言われた。「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ。いつまであなたがたといっしょにいななければならないのでしょうか。いつまであなたがたにがまんしていなければならないのでしょうか。その子をわたしのところに連れて来なさい。』

2ペテロ3:9「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」